



Title	大阪大学西洋史学会若手セミナー 活動記録 : 2019年12月～2020年12月
Author(s)	
Citation	パブリック・ヒストリー. 2021, 18, p. 59-63
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/79230
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大阪大学西洋史学会若手セミナー 活動記録

2019 年 12 月～2020 年 12 月

報告要旨

（所属等は報告当時のもの。会場は、第 64 回のみ大阪大学大学院文学研究科西洋史学研究室、第 65 回以降はすべてオンライン開催。）

第 64 回例会(1) (2019 年 12 月 6 日)

「重荷」としての戦争障害者—第二次世界大戦後ドイツにおける戦争障害者と家族を中心に—

伊藤光葉

（大阪大学大学院文学研究科博士前期課程）

本報告では、20 世紀ドイツに焦点を当て、戦争障害者がなぜ不可視化されてきたのかという問題を、精神医学・戦争障害者援護に焦点を当てた先行研究を踏まえて論じた。

第一次世界大戦以降、精神科医は戦争神経症を、年金搾取を目的とした遺伝性疾患と捉えており、第二次世界大戦後に「外的要因」説が登場するまで、「定説」が精神医学界に多大な影響力を及ぼしていたことを提示した。この点に関連して、第二次世界大戦期のチュービンゲン野戦病院を事例として紹介し、治療を行った精神科医たちには患者の処遇に関して「判断の余地」が存在したことを主張した。

次に、第二次世界大戦後の戦争障害者に対する職業教育を考察した。各自治体は戦争障害者のために職業訓練コースを

開設したものの、戦争障害者に対する特別扱いを疑問視する世論が強まり、年金受給権を持つ戦争障害者が減少した 1960 年代には、彼らの存在が社会のなかで不可視化されるようになったことを指摘した。

第 64 回例会(2) (2019 年 12 月 6 日)

「マックレイキング再考：世紀転換期アメリカ・ジャーナリズムの「道德家」

浦田光

（大阪大学大学院文学研究科博士前期課程）

本報告では、20 世紀初頭のアメリカ合衆国を席卷した、政界・経済界のスクandal を暴露する報道界のムーブメントである「マックレイキング」に注目し、歴史学におけるこれまでの研究を整理した。先行研究では、マックレイキングに従事したジャーナリストらが近代化の中で生み出された社会問題を解決しようとする改革者なのか、あるいは商業的利益を追求する企業家なのかが議論されてきた。一方、近年のジャーナリズム史の研究動向に目を向けると、マス・メディアの改革志向と商業志向は併存するものとして考えられている。しかしながら近年は停滞気味であるマックレイキング研究は、こうした隣接分野の研究と接続がなされておらず、ここに研究余地があることを指摘した。

第 64 回例会(3) (2019 年 12 月 6 日)

「戦間期におけるセネガル歩兵」

谷垣美有

(大阪大学大学院文学研究科博士前期課程)

1857 年にアフリカにおける植民地拡張のための現地人部隊として、フランスによって設立されたセネガル歩兵 (Tirailleurs Sénégalais) は、第一次大戦以後、フランスの防衛、そして帝国の防衛のために貢献を続けた。これまで、セネガル歩兵については、両大戦を中心として、彼らの戦時経験や、帝国における彼らの役割について、様々な研究が積み重ねられてきた一方で、平時、とりわけ両大戦間期への注目は希薄であったといえる。

本報告では、セネガル歩兵が初めて本国の防衛に参加した第一次大戦を起点とし、戦間期へと続く、植民地と本国の軍事的関係性の在り方を検討した。そこでは特に、平時にも継続する要素として、「援助」に注目し、大戦中から 1969 年まで活動を行った植民地兵への援助団体「黒人兵支援委員会 (CATN)」を取り上げた。

第 65 回例会 (2020 年 7 月 17 日)

「20 世紀ブラジル・サンパウロ州におけるコーヒー生産—Mauricio A. Font, *Coffee and Transformation in São Paulo, Brazil* にもとづいて—」

野口駿之介

(大阪大学大学院文学研究科博士前期課程)

本報告では、*Coffee and Transformation in São Paulo, Brazil* が自分の研究にどのような位置づけることが可能なのか考察した。

本書は、1890 年から 1930 年の間に経済成長するブラジルのなかでも、経済の基盤が農業から工業へと最も発展したサンパウロ州の社会的、政治的、経済的な力の相互作用を理解する点で有益である。著者の研究と自身の研究の接点を同時期のコーヒーだけでなく、ブラジル経済の観点から説明した。そして、先行研究の整理から従来の研究がブラジルと西洋諸国との 2 国間貿易や経済的つながりの視点にとどまっていることを指摘した。同時期、特に第一次大戦以降のブラジルにおけるコーヒーの輸出において、アメリカ合衆国が重要となっていく。輸入において、第一次大戦以前はイギリスが最大の貿易相手であったが、第一次大戦以降はアメリカ合衆国がその地位を獲得する。この点から、ブラジルが帝国または国家に対して、従属的な位置にあったわけではなく、主体的にどの国家と関係を持つか選択したのではないかという現段階の考察を提示した。

第 66 回例会 (2020 年 7 月 31 日)

「15 世紀における都市ローマと教皇庁—Elizabeth McCahill, *Reviving the Eternal City: Rome and the Papal Court, 1420-1447* を基に—」

谷香里奈

(大阪大学大学院文学研究科博士前期課程)

本報告では、Elizabeth McCahill の *Reviving the Eternal City: Rome and the Papal Court, 1420-1447* に着目し、アヴィニョンからローマに帰還した教皇マルテ

イヌス 5 世およびエウゲニウス 4 世の治世と、次代のルネサンス教皇ニコラウス 5 世の治世との時代の連続性を人文主義者や教皇庁の視点から検討した。

McCahill は史料が乏しいクワトロチェント（15 世紀）の中で人文主義者の作品や残存する史料を組み合わせる分析を行い、ローマを教皇がどのように解釈していたのかを明らかにする。著者は、それらの史料を手掛かりに聖職者の振る舞いや教会改革のビジョン、教皇の儀式、ローマの復興政策を取り上げ、クワトロチェント前半とルネサンスの時代に連続性があると強調する。

本報告では、教皇と都市政府との関係を教皇・教皇庁の一方的な立場で捉えていることを課題として指摘した。

第 67 回例会（2020 年 9 月 18 日）

「アメリカ・カナダにおけるパブリック・ミーティング研究の動向ーデジタル時代の先行研究収集の方法に着目してー」

森井一真

（大阪大学大学院文学研究科博士後期課程）

近年進展するデジタル・ヒストリーの議論では、従来、歴史家が技術的に扱うことができなかったことを可能とする方法論が注目されている。その一方、日々、大学院生が取り組む研究作業は、すでに多くの部分がデジタル化しているにもかかわらず、個別具体的な作業の妥当性は検証されることが少なく、その方法自体も個人に委ねられていることが多い。本報告は、院生が日々使う技術を参加者同士

で共有し、その妥当性を批判的に検討することを目的に行われた。特に、先行研究を収集する方法に着目し、著名雑誌のアーカイブズ検索・Google 検索・論文データベースの検索・SNS を用いた検索のそれぞれを、報告者が進める、アメリカ・カナダのパブリック・ミーティング研究の収集を例に、検討した。フロアとのディスカッションでは、それぞれの技術的方法に関して情報が交換されただけでなく、研究全体のなかでどの技術をどの目的のため用いるべきかについて、有益な議論が行われた。

第 68 回（2020 年 9 月 25 日）

「古代ローマの疫病解釈と祭祀」

堤亮介

（大阪大学大学院文学研究科博士後期課程）

本報告では、ラテン語史料における疫病叙述を包括的に分析したうえで、ローマ人の疫病に対する認識を検討した。

リウィウスなどの歴史家たちによれば、ローマ人は疫病に際して、「神々の怒り」を宥めるため、祈祷や「神々の饗宴」といった祭祀を、政務官や祭祀担当委員たちの指導の下で行った。それゆえローマ人は疫病を超自然的現象であると認識していたと論じられる。他方、歴史家たちは、疫病の原因が「神々の怒り」のみならず、「天候の不順」といった物理的現象であるとも論じ、かつそれらを二者択一的なものとして示している。さらに、祭祀が社会的統制手段としての機能を持つと考えられる以上、ローマ当局

が疫病を「神々の怒り」によって引き起こされる超自然的現象として認識していたと素朴にとらえることはできない。

疫病の叙述をつぶさに見る限り、著者自らが疫病を「神々の怒り」に帰すケースはそれほど多くはなく、かつその場合には同時期の統治者に対する道徳的批判を伴っている。一方、疫病の終息への神々の介在は一般的なものであり、原因と終息においては超自然的作用の意義づけは異なることが明らかになった。

第 69 回例会 (2020 年 12 月 8 日)

「1920 年代のブラジルコーヒー産業—コミサリオへの着目—」

野口駿之介

(大阪大学大学院文学研究科博士前期課程)

本報告では、1920 年代のブラジルコーヒー産業がなぜうまくいったのかという問いを考察した。先行研究やコーヒーの生産・輸出のデータに着目すると、1920 年代までコーヒー産業が上手くいったことがわかる。そこで、ブラジルの仲介業者 (コミサリオ) が生産・流通に重要な役割を果たしていたのではないかとの仮説を設定し、ブラジルの仲介業者に関する先行研究を整理した。仲介業者の役割は、19 世紀末が盛期であり、それ以降は英国をはじめとする西洋諸国の輸出業者にその役割が取って代わられたとされてきた。しかし、1920 年代においても、コーヒー農園にとって仲介業者は依然として重要であったことが 1930 年にアメリカ合衆国商務省が出版した報告書で指摘

されている。仲介業者は、特に金融面において、コーヒー農園を支えた。彼らは、コーヒー農園にとって銀行としての役割を果たし、農園の運転資金などを提供した。本報告では、仲介業者の一端を明らかにすることができた。

第 70 回例会 (2020 年 12 月 9 日)

「教皇庁と都市ローマのルネサンス—道路管理局から見る—」

谷香里奈

(大阪大学大学院文学研究科博士前期課程)

15 世紀に教皇マルティヌス 5 世がアヴィニョンから都市ローマに帰還した時、都市ローマは諸権力がせめぎ合い、巡礼者が激減し、衛生環境は悪化するという状態にあった。さらに、教会大分裂直後の教会は、公会議至上主義と教皇至上主義の対立によって動揺していた。そのため教皇権の所在さえ曖昧であった。

従来の研究では、ルネサンスは 15 世紀後半以降、特に教皇エウゲニウス 4 世のローマ帰還後に位置付けられていた。しかし、近年の研究では、世俗面での復興は 15 世紀前半にあったことから、ルネサンスはマルティヌス 5 世の治世にもあったとされている。15 世紀前半の教皇庁の文化政策と都市ローマとがどのように関わっているのかについて取り上げた。近年の研究に基づいて、都市ローマを地価や施療院、都市計画から捉え、その中でも、道路管理局は建物の保護や道路の管理を行う部局であることからルネサンスに大きく関わったと着目した。

第 71 回例会（2020 年 12 月 18 日）

「戦時」と「戦後」のはざまで一第二次
世界大戦後西ドイツにおける帰還者同盟
の自助活動一」

伊藤光葉

（大阪大学大学院文学研究科博士前期課程）

第二次世界大戦後の西ドイツでは、多数の退役軍人のための組織が自主的に結成された。なかでも帰還者同盟（Verband der Heimkehrer）は、元戦争捕虜に対する補償に最も重要な影響を与えた退役軍人団体の一つであった。本報告では第二次世界大戦後の西ドイツにおいて、帰還者同盟の形成と発展の理由について、帰還者同盟が関わった住宅支援建設、および帰還者の心の問題という点に着目して検討した。

地方自治体などの住宅ローンは整備の遅れや申請数が制限されたため、帰還者同盟は帰還者自身が建設作業に関わる「自助努力」を推奨することで住宅建設を支援していた。この住宅建設支援のように、帰還者の戦後の生活基盤を構築することによって、「失われた自己」の回復を促した点が帰還者同盟の発展要因の一つであった。同時に、帰還者同盟が「無力さ」を感じていた加入者たちに、帰還者の「代表」、あるいは、国民の犠牲の「代理」といった新たな自己意識を与えたことで、その存在意義を維持することができたのである。